

## 『君たちはどう生きるか』

2018年01月19日

新聞やテレビで、吉野源三郎氏の『君たちはどう生きるか』がベストセラーになり、関心を集めているとさかんに報道されている。漫画化された本がよく読まれているらしく、アニメ映画も作られると聞く。私は、2017年12月25日 第80刷発行の「岩波文庫」を買って、読んだ。面白かった。そして、涙した。『君たちはどう生きるか』は、1937年に出版された。1931年の満州事変から、軍部はアジア大陸に侵攻を開始し、軍国主義が日ごとに勢力を強めていた。1937年は、盧溝橋事件が起こり、日中戦争へのめり込んでいった。欧州ではムッソリーニやヒトラーが政権を取り、ファシズムが脅威となり、第二次世界大戦の危機が世界を覆っていた。日本においても、言論、出版の自由が制限され、労働運動や自由主義運動は厳しく弾圧されていった。そのような時代に、山本有三氏を中心に、少年少女向けの16巻の双書『日本少国民文庫』が計画され、刊行された。執筆者たちは、次の時代を背負う少年少女たちに偏狭な国粹主義的な思想を超えた自由で豊かな文化を伝え、人類の進歩について信念を養いたいとのヒューマニズムの精神にあふれていた。『君たちはどう生きるか』は双書の中の「倫理」を扱うもので、当初は山本氏が担当する予定であったが、眼の病気に罹り、急遽、吉野氏が執筆することになった。このような時代背景の中で刊行された本が、ベストセラーになっていると聞くと、1937年が戦争できる国にしようと軍備拡張を目指す安倍政権の現在と重なって見えるのは、私だけであろうか。

主人公は中学2年生、15歳の本田潤一という少年で、彼はコペル君というあだ名が付けられている。コペル君というあだ名はコペルニクスに由来する。教会が頑として天動説を唱えていた時代、コペルニクスは科学的根拠に基づき地動説を主張した。このあだ名から分かるように、物の見方をひっくり返し、しかも、事実即して理性的に見るというコペルニクスの転換で貫かれている。『君は』は倫理の問題を扱い、自分を律し、思いやりのある生き方を説いている。しかし、倫理だけでなく、社会に対する科学的認識の重要性を説いている。軍国主義の偏った精神主義が覆っていた時代、考え方を換え、理性的であれという主張で対峙している訳である。コペル君は生活の中で体験した様々のことで知恵をつけ、悩み煩悶するが、叔父さんとの対話を通して、成長し、動揺する青春期に自分を形成していく形で書かれている。

テーマは多岐に渉るが、私が涙した一点だけを紹介したい。同級生の友だちと、上級生からリンチされる時は、一緒に殴られようと約束していた。ひとりの友だちがリンチを受ける恐ろしい場面に遭遇した。二人の友人はリンチの中に入り、痛みと恐怖を共に分け合った。ところが、コペル君は見てはいたが、身がすくみ、中に入ることができず、傍観していただけであった。友情を裏切り、自己保身に走ったのである。コペル君は自責と後悔の念で半月も寝込んでしまった。自分を責め、友情を失った悲しみに打ちのめされた。心の中で言い訳をしたい卑屈な自分があることを知って、ますます落ち込んだ。苦しみの中で、叔父さんに相談したところ、きっぱりと、謝罪の手紙を書くように促され、涙ながらに手紙を認める。まんじりともしないで返事を待つが、3人の友だちが訪ねて来てくれる。赦されたことを知ってコペル君は喜び、立ち上がる。誰もが経験したことではないか。苦しみぬき、謝罪して、赦しを得、和解、共生を生み出したのである。

この問題は個人においても起こるが、国家間においても妥当する。過ちを隠蔽したり、自己正当化の言い訳をしたりせず、率直に謝罪するところで平和が作り上げられていく。